

史跡・今城塚古墳

— 平成15年度・第7次規模確認調査 —



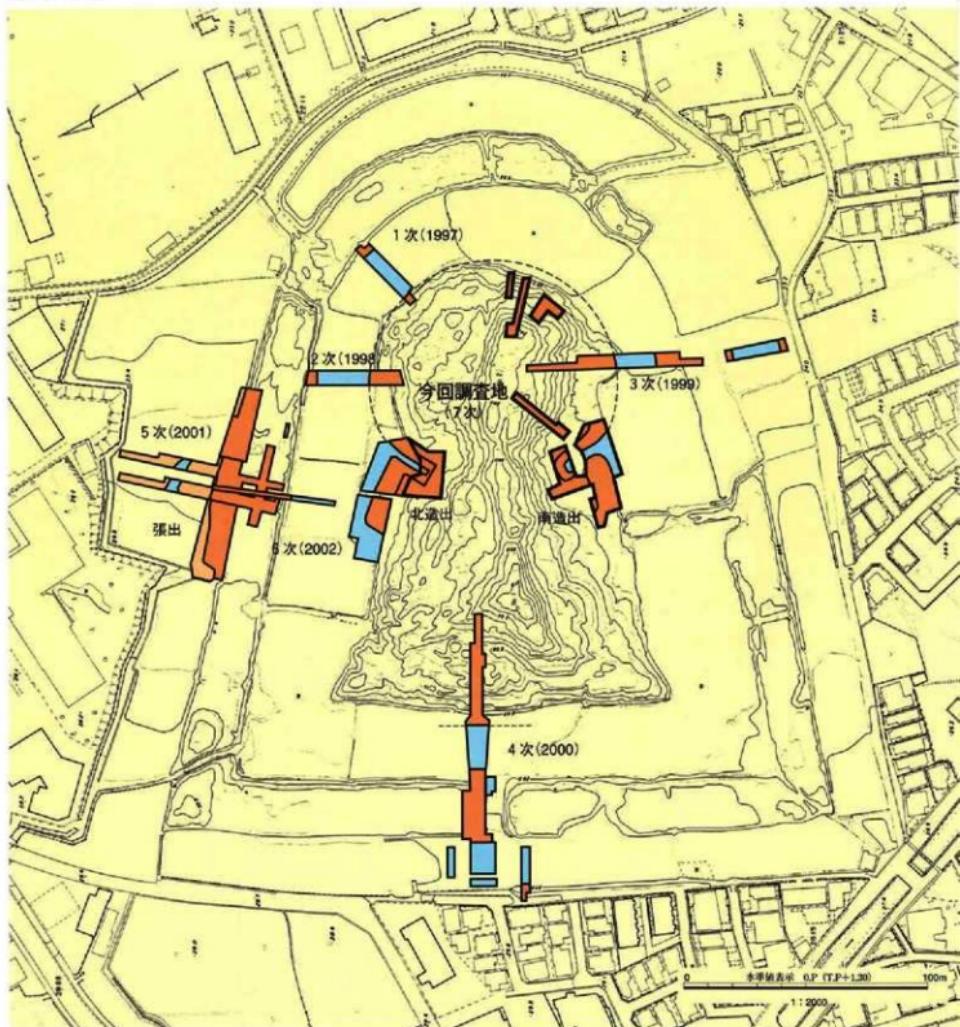
2005

高槻市教育委員会

はじめに

今城塚古墳は大阪平野の北東部、北摺山地と淀川にはさまれた三島地域のほぼ中央部に位置する前方後円墳です。墳丘の全長は190m、墳丘の周開を一巡する二重の濠と堤とを含めた総長は約350mを測り、古墳の築かれた6世紀前半に限れば日本最大の規模となります。「今城」という名は戦国時代に墳丘や濠を利用して城砦とされた伝承に由来し、これを裏付けるように火縄銃の弾丸が出土しましたが、城砦の痕跡は確認されていません。墳丘は1596年に発生した伏見地震の際、大規模な地滑りと崩落を起こし、本来の姿を失っています。

このため、高槻市では今城塚古墳の保存整備に向けた規模確認調査を実施し、古墳本来の姿を追究してきました。第7次調査は、後円部を中心とした墳丘の遺存状況と、南北くびれ部から造出にかけての規模や形状を探るために行いました。





テラスと円筒埴輪列（東北側から）

後円部の状況

テラス

墳丘東側の中腹にひろがっている緩斜面から、第1段目斜面と2段目斜面の間に設けられた幅約4.5mのテラス（平坦面）がはじめてみつかりました。上面は外（内濠）側にむかって約8度傾斜し、テラス外縁よりも約1m内側では円筒埴輪列が確認されました。埴輪は底部のみ遺存し、上部は残っていませんでした。

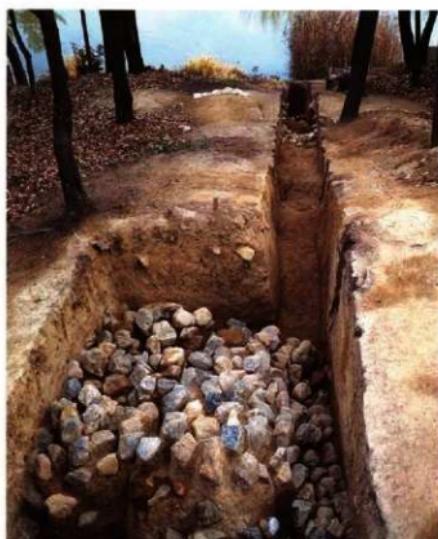
葺石

後円部東側斜面では葺石を確認しました。径30~50cmの川原石を墳丘斜面に沿って据えつけたもので、葺石基底部から1mほどの高さまでは比較的大きめの石を60度前後の急角度で積み上げ、その上方は15~20度の緩い角度でやや小ぶりの石を列石状に並べています。裾の基底石はテラス上面覆土の中に埋まった状態でした。



葺石（北側から）

墳頂東辺では墳丘内から石積み遺構が発見されました。径20~30cmの川原石を整然と小口積みし、さらに盛土を部厚くほどこしていました。現存高は1.3m、16~22度の傾斜面をもっていますが、石の規模・積み方などは明らかに葺石との違いをみせています。このように盛土内に埋めこまれた状態の石積みは、大形前方後円墳としてはこれまでに例をみません。



墳丘内の石積み（西側から）

排水溝

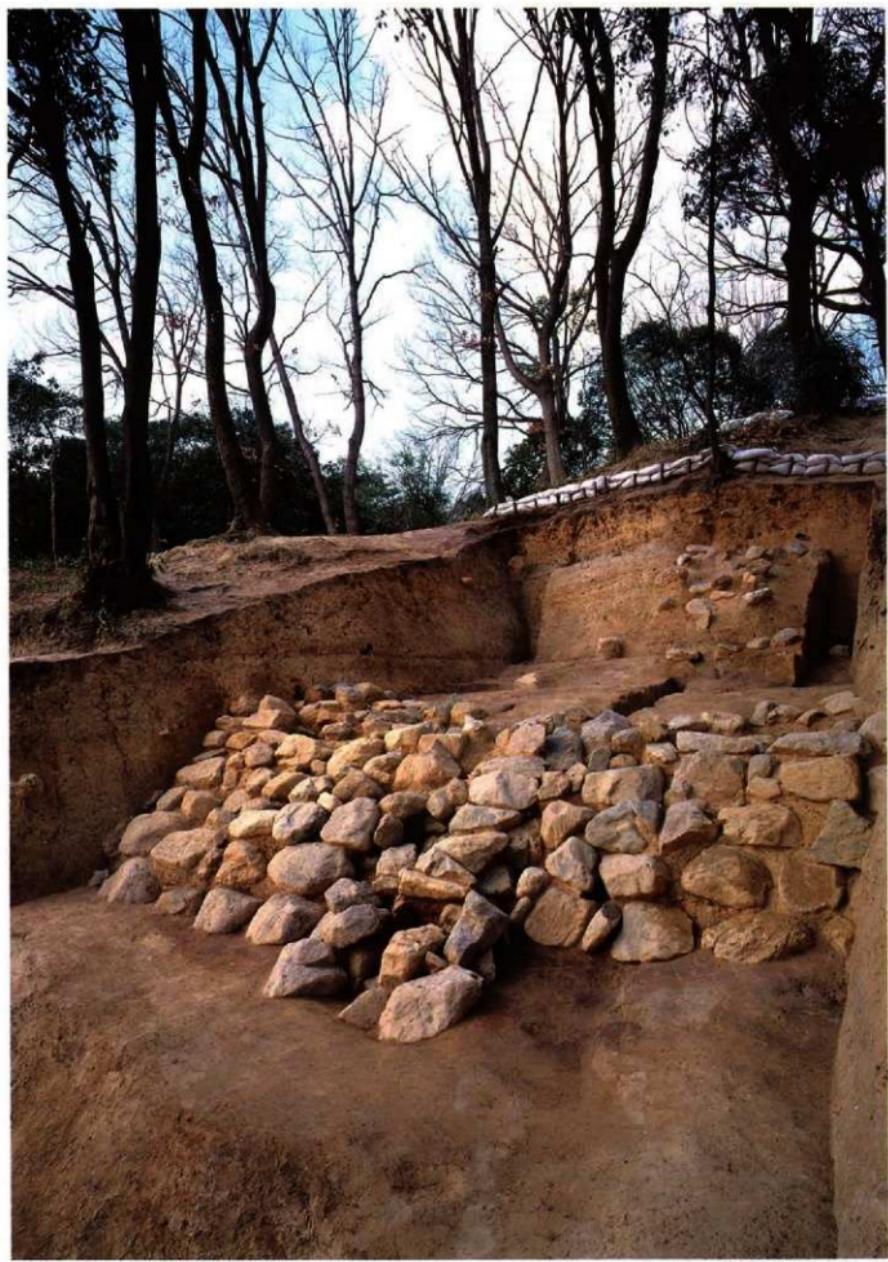
後円部南東側では葺石とともに石組みの排水溝を検出しました。排水溝は現存高1.1mの葺石に組み込まれた形で、先端は葺石基底部よりも最大0.85m突き出ていました。平らな石を並べて底と側壁をつくり、蓋石をかけた暗渠構造で、先端部の内寸は幅0.25~0.3m、高さ0.25~0.3mを測ります。溝内の堆積土は現状で上下2層が観察され、下層は黄灰色土、上層は赤褐色土です。排水溝を中心にV字形の範囲で葺石の積み方が異なっており、葺石の性格や、葺石と排水溝の施工手順を考える手がかりとなりました。

平坦面と焼土層

葺石上端から墳丘内にかけては平坦面を検出しました。範囲は幅・奥行きとも3.5m以上で、約9度の緩やかな勾配をもちながら中心部に向かって上昇しています。ここには崩落した盛土や流土が堆積していました。流土直下では石棺片が出土するとともに、炭粒を含む厚さ1~2cmの焼土層の広がりを検出しました。



排水溝



後円部葺石・排水溝・平坦面（東側から）

造出・くびれ部

墳丘北側では、地滑りによる墳丘崩壊土の下方でくびれ部と北造出を検出しました。

北造出は裾部が南北約19m、東西約35mの長方形を呈します。盛土は旧地表とともに滑落したために本来の高さは不明ですが、現存する上面は南北約10m、東西約15mを測ります。造出と後円部との谷部はくびれ部から内濠側にむかってゆるやかに下降しながら開く溝状となっています。

墳丘南側では、北造出に対応する位置から、あらたに南造出を検出しました。地滑りによって完全に埋没していたものです。北造出とほぼ同規模で、内濠水際には、径60cm前後の大きな川原石をびっしりと敷き詰めた護岸列石がよく残っていました。

南造出の斜面からは円筒埴輪や須恵器（蓋杯・甕・器台など）の小片がわずかに出土した程度で、北造出と同様に形象埴輪はみられませんでした。

南くびれ部の谷部は後円部と南造出とに挟まれた幅約9mの溝状となっていました。南くびれ部と北くびれ部の基底部の距離は約52.6mを測ります。後円部裾近くでは2個体の蓋形埴輪が出土しています。部分的に鮮やかな朱色をとどめ、笠部～肋木を表現した大形品で、類品は新池18号窯で出土しています。



蓋形埴輪出土状況



南造出と後円部（南西側から）



北造出とくびれ部（北側から）



伏見地震の痕跡

南北のくびれ部や造出は墳丘側から流出した盛土が二次堆積していました。南造出付近では墳丘の基底部分にある黒い盛土を斬ち切るように、黄色い盛土が崩壊しながら内濠にむかって滑落していました。

北くびれ部では前方部の盛土が縱横とも一辺数メートルもの大きな塊となって滑落する様子が観察できました。



大規模な地滑り跡（上）北くびれ部
（下）南 造 出

まとめ

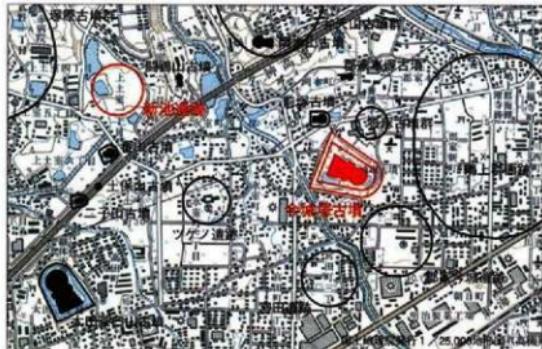
今城塚古墳の後円部を中心とした第7次調査では、葺石やテラス、円筒埴輪列などの外施設をはじめて検出し、墳丘の状況が明らかになってきました。とくにテラスと円筒埴輪列の確認は、今城塚古墳の後円部段築の規模等を知るうえで重要です。

主体部については、これまで横穴式石室の可能性が指摘されてきましたが、具体的なデータを得ることはできませんでした。今回みつかった排水溝については、横穴式石室からのびる物集女車塚古墳(京都府向日市)などの事例からみて、主体部の究明につながる重要な手がかりとなり得るものです。また墳丘内の石積みは、墳丘の構造や主体部との関わりが注目されます。

造出はこれまで墳丘の北側だけにあったと考えられていましたが、あらたに南造出を検出したことにより、南北両側に築かれていたことが明らかになりました。古墳時代後期の今城塚古墳が、古市・百舌鳥古墳群などにみられる中期の大形前方後円墳の形態を引き継いでいることになり、古墳の編年観にも一石を投じる大きな成果といえるでしょう。



今城塚古墳とその周辺



史跡・今城塚古墳 一平成15年度 第7次規模確認調査一

所 在 地／高槻市郡家新町
史跡指定／1958年2月18日
1991年7月20日 新池塩製作遺跡
を追加指定
指定面積／84,230.4m²
ア ケ ツ／JR摂津富田駅から北へ1.5km、徒歩20分
または同駅から市バス奈佐原行き
「福祉センター前」下車、徒歩3分

編 集／高槻市教育委員会 文化財課
埋蔵文化財調査センター
高槻市南平台5丁目21-1
TEL 072-694-7562
発 行／2005年2月10日
印 刷／株式会社 日東印刷
TEL 072-677-3711